

大学生のやる気とその影響要因についての研究

A study of motivation and its factors affecting College students

李 艶

Li Yan

安岡 秀竜*

Yasuoka Hidetatsu

要 約

Yamauchi & Li(1994)は達成動機の構造と仕事のやる気に関する研究によると、達成動機は仕事へのモチベーションに深い関連があった。秋山ら(2003)の気力尺度の作成及び気力と諸要因との関連についての研究で、大学生に見られる「Student apathy」などもやる気の低下と大きく関わりがあったことがわかった。社会的比較志向性は近年注目されつつである。社会的比較理論(Festinger, L.1954)によると、人には自分の意見や能力を評価しようとする動因がある。すなわち、やる気そのものに強く関係すると考えられる。

本研究は大学生のやる気に関連する要因について、質問紙調査を通じて、明らかにすることを目的とした。

質問紙調査は現役の大学生を対象に、既存の社会的比較志向性尺度、達成動機測定尺度、気力尺度を参考にして、大学生のやる気とやる気に関連する要因の質問紙を作成し、それを使用して調査を行った。

結果から、やる気のある人は目的達成意識と向上欲求が高いことが明らかになった。一方で「社会的達成欲求」と「能力比較」はやる気に対して有意な影響を及ぼしていなかった。このことからやる気がある人は他人の評価、他人との能力の比較や社会的な欲求を重視していないと言えるだろう。つまり、やる気の高い人の主要な心の働きは自分自身を評価して、他人の評価をあまり気にしないことがわかった。さらに本研究でも、やる気は内発的であり、自己効力感に強く関係があり、他者との比較より自己評価をすることに関係があることを、裏付けた証拠が得られた。

Key Words: 大学生、やる気、達成動機、気力

* 安岡秀竜 聖泉大学の卒業生

注記：本研究は研究倫理遵守したことを明記する。

目的

「なせば成る」とは頑張れば結果が出る。そこで、為すことは行動、なることは結果であると理解されるはずだろう。やる気は行動を引き起こす源と言えるのでしょうか。一体やる気は何だろう。やる気の深層をわかれば、常に意欲的にふるまえることが可能でしょう。

やる気は様々な要因に関連することが考えられる。

達成動機は優れた目標を立て、それを実現しようとする意欲で、社会的動機の一つである。つまり、人々は自分にとって価値のある目標を困難があってもやり遂げたいという意欲を満たすために、自分自身の行動を引き起こすきっかけとなる欲求・思い・気持ちのことである。達成動機の因子構造は研究者たちの主題として研究されてきた。Yamauchi & Li(1994)は達成動機の構造と仕事のやる気に関する研究によると、達成動機は仕事へのモチベーションに深い関連があった。

近年、マスコミではストレス社会の影響もあり様々なことに関する人々のやる気が低下していると言われている。例えば、新人社員の五月病又はうつ病、過労自殺など様々な社会現象に関する情報があふれている。他にも、秋山ら（2003）の気力尺度の作成及び気力と諸要因との関連についての研究で、大学生に見られる「Student apathy」などもやる気の低下と大きく関わりがあると思われる。

秋山（2003）の研究によると、近年、学生の大学への不適應問題が大きく取り上げられており、「student apathy」傾向のある学生の援助について議論がなされてきている。その一環として、症状改善を数値として実感できる気力尺度を作成することは、カウンセリング等の援助へクライアントを積極的に向かわせることにもつながり、非常に有用だと考えられる。また、気力は一般的に用いられる言葉であるが、その概念は曖昧であり、気力そのものを対象とした研究は見られない。

このようにやる気の低下により、日常生活において様々な支障が出ることもある。やる気がない人はおおよそその物事においてあまり良い結果が出なかったり、納得のいく生活が出来ていないことが多いのではないかと考えられる。一方やる気のある人は、マイナスの出来事に陥ったり、良くない結果になることは少ないのではないだろうか。それにより、やる気がある人には様々な向上心やポジティブな感情と言ったプラスの面も比較的に多いと思われる。言わば、このように私たちの生活においてやる気が非常に大切であると言える。又、どんな行動をするにしても、その根底には必ずやる気に関係していると言える。

では、やる気とはそもそも何かということであるが、秋山（2003）の気力尺度の作成及び気力と諸要因との関連についての研究によると、気力（やる気）とはそれぞれ、「尽力」、「精力」、「克服」、「継続」という 4 因子から成るもので、「行動を起こさせ、それを維持するために日常的に生じるエネルギーであり、ある特定の目標や困難な状況があるとき、特に強く生じるものである。」と定義づけている。この様にやる気というものの自体の定義はされている。そこで、このやる気を起こさせるものは一体何なのかという疑問が生じる。又、やる気がある人はどのような要因でやる気が出るのか、また、どのような要因でやる気なくなるのかという事が明確になっていない。もし、これらの要因を明確に出来たらより良い生活が送れるのではないかと考えられる。

社会的比較志向性は近年注目されつつである。もともと、社会的比較理論は Festinger, L. (1954) 提唱した自己評価の原理に関する理論であり、基本的な考えは人には自分の意見や能力を評価しようとする動因がある。客観的もしくは物理的手段が利用できない場合、他者の意見や能力との比較を行うことによって、自分の意見や能力を評価しようとする。すなわち、人は複雑な社会環境を適切に理解し、それに効果的に対処しようと努める。すなわち、やる気そのものに強く関係すると考えられる。

本研究は、達成動機、社会的比較志向の側面から、やる気を起こさせるにはどのような要因に関係があるのか、また、どの要因が大きく関係しているのかを検討することが目的である。

方法

被調査者：

近畿の大学に在籍した大学生を対象に調査を実施し、被調査者は大学生であるため 20 歳代がほとんどであった。有効調査者数は男性 65 名、女性 60 名、合計 125 名であった。

質問紙：

本研究の調査用質問紙（やる気に関する尺度）は以下の既成尺度を参考にして、現役の大学生の状況を踏まえて構成した。

参考になった既成尺度は社会的比較志向性尺度（外山，2002）、達成動機測定尺度（堀野，1987）、やる気尺度は気力尺度（秋山ら，2003）を使用した。

気力尺度には「尽力」、「精力」、「克服」、「継続」という 4 因子、達成動機測定尺度には、「社会的達成欲求」、「個人的達成欲求」、「挑戦・成功欲求」という 3 因子、社会的比較指

向性尺度には、「能力比較」、「意思比較」という 2 因子があると先行研究では明らかにされている。

質問紙の回答方法は 5 件法を使い、5 段階の評価として調査を実施した。

つまり、1. ほとんど当てはまらない、2. あまりはてはまらない、3. どちらともいえない、4. 少しあてはまる、5. 非常にあてはまる、の 5 段階の回答方法を取った。

構成された質問紙のうち、やる気尺度の質問項目である問 3「1 つの事に対して集中力が続かない」、問 12「何に対してもすぐあきらめてしまう」と、社会的比較志向性尺度の質問項目である問 25「あまり自分と他の人を比べる方ではない」については既存の尺度が逆転項目になっており、結果を分析した際に点数を逆転して算出する。

予備調査

実際に本調査を実施するにあたり、構成された尺度が適切であるか、事前に予備調査して構成された質問紙について検討を行った。さらに因子構造の傾向も調べた。予備調査段階で、構成された質問紙の因子分析をした結果、社会的比較指向性尺度、達成動機測定尺度、気力尺度ともにそれぞれで先行研究と異なった因子構造になった。おそらく、予備調査を行った人数が少数であったことが考えられる。更に先行研究が実施された時代の人々の認識と現代における学生の中での認識が異なっているという事も考えられる。

よって、本調査を実施する上での注意点として、調査する人数と今の時代に合うように質問項目の内容を修正して本調査を注意して実施する必要があることが明らかになった。

本調査

分析の手続き

予備調査の結果を検討・確認・修正を行い、本調査の質問紙を完成した。それを利用して本調査を行った。

本研究の目的から、気力尺度を従属変数とし、社会的比較指向性尺度と達成動機測定尺度を独立変数として、分析を行うべきと考えた。

まず、独立変数を因子分析する。そのあとに気力尺度との相関を見るため、重回帰分析をする。重回帰分析の結果によって両者の関係性を明らかにする。

調査方法としては予備調査と同じく質問紙を対象とした大学の授業内で配布し回答してもらった。予備調査で明らかにしたそれぞれの尺度の中で、因子ごとに因子負荷量の高

い項目を選んで、計 32 項目を使用した。

なお、調査に用いた質問紙は本論文の最後の付録に添付した。

結果

因子分析の結果

まず、予備調査の段階で確定した「社会的比較指向性尺度」の「能力比較」、「意思比較」という 2 因子と、「達成動機測定尺度」の「社会的達成欲求」、「個人的達成欲求」、「挑戦・成功欲求」という 3 因子からそれぞれ因子負荷量の高い項目を、合計 20 項目選択して因子分析を行った。固有値や対角 SMC では 5 因子が妥当であると示された。そこで、因子数を 5 と指定しプロマックス回転(最小二乗法)による因子分析を行った。

第 1 因子と第 3 因子に関しては先行研究とほとんど変わらない結果になったため、先行研究と同じ因子名とし、第 1 因子は「社会的達成欲求」、第 3 因子は「能力比較」と命名した。

第 2 因子は 5 項目で構成されており、「自分の好きなことに上手くなるためには努力する。」「なんでも手掛けたことに最善をつくしたい」といった目的を達成したいという欲求に関する項目に高い負荷量を示した。そこで、「目的達成意識」と命名した。

第 4 因子は 3 項目で構成されており、「いつも何かの目標を持っていたい。」「何か新しいことにチャレンジするのは好きだ。」「といった、目的をもったり、新しいものにトライしたいといったポジティブで向上したいという項目に高い負荷量を示した。そこで、「向上欲求」と命名した。

第 5 因子は 3 項目で構成されており、「他人が失敗している事でもやりたい。」といった失敗を顧みずに挑戦したい、といった項目に高い負荷量を示した。そこで、「挑戦欲求」と命名した。

やる気に関する要因の因子構造を表で示す。

表1 やる気に関する要因の因子構造

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	共通性
15	.849	-.052	-.114	-.106	.245	.780
13 社会的達	.831	.010	.118	.140	-.220	.771
16 成欲求	.647	-.059	.141	.144	-.061	.528
20	.466	-.033	.018	-.025	.252	.356
28	-.150	.684	.223	.038	.068	.563
21	-.041	.640	-.078	.280	-.057	.503
26 目的達成 意識	.058	.507	-.052	.014	.195	.387
17	.138	.506	-.114	.182	.073	.455
32	-.026	.469	.132	-.023	-.059	.248
30	-.092	-.247	.829	.226	.184	.632
31	-.018	.052	.770	-.171	.099	.634
29 能力比較	.174	.054	.598	.168	-.091	.540
27	.118	.266	.549	-.181	-.034	.533
25	.081	.088	.405	-.235	-.247	.313
14	.361	.043	-.141	.624	.017	.730
22 向上欲求	-.047	.232	-.032	.533	.144	.464
23	-.054	.370	.039	.432	-.042	.373
24	-.083	.040	.012	.089	.683	.486
18 挑戦欲求	.163	.035	.052	.134	.464	.418
19	.348	.066	.060	-.119	.436	.447
因子寄与	4.400	3.572	3.013	2.685	2.574	

表 2 やる気に関する要因の各因子の質問項目構成

社会的達成欲求	15 世の中に出て成功したいと強く願っている。 13 周りの人々が称賛してくれるような素晴らしいことをしたい。 16 難しい仕事を上手くやり遂げたと人に言いたい。 20 社会の高い地位を目指すことは非常に重要だと思う。
目的達成意識	28 自分に似たような問題に直面している人が、何を考えているのかをよく知ろうとする。 21 自分の好きなことに上手くなるためには努力する。 26 他の人とお互いに意見や経験について話すのが好きだ。 17 何でも手掛けたことに最善をつくしたい。 32 何かについてもっと知りたいと思うとき、それについて、他の人が何を考えているのかを知ろうとする。
能力比較	30 自分がどのくらい社会的であるかを、他の人とよく比べる。 31 自分の親しい人の状況と、他の人の状況をよく比べる。 29 今まで自分がやり遂げたことについて、他の人とよく比べる。 27 他の人のやり方と比べて自分のやり方はどうであるか、いつも気にしている。 25 あまり自分と他の人を比べる方ではない。
向上欲求	14 いつも何かの目標を持っていたい。 22 何か新しいことにチャレンジするのは好きだ。 23 仕事を上手くやるためには難しいことでも時間をかけてやる。
挑戦欲求	24 他人から与えられたことをするより失敗の可能性が50%あっても自分で計画してやることの方が好きだ。 18 他の人が失敗している事でもやりたい。 19 重要な人々と知り合いになるように努める。

重回帰分析の結果

分析対象

因子分析の結果で出た 5 因子、「社会的達成欲求」、「目的達成意識」、「能力比較」、「向上欲求」、「挑戦欲求」を独立変数、気力尺度から 12 項目選択し構成されたやる気因子を従属変数とする重回帰分析を行った。気力尺度から構成された因子は表 3 に示す。

各独立変数、「社会的達成欲求」、「目的達成意識」、「能力比較」、「向上欲求」、「挑戦欲求」の影響を検討した結果は表 4 に示す。

表 3 気力尺度の 12 項目

やる気因子	<ul style="list-style-type: none"> 1 何事に対しても努力する。 2 やる気満々だ。 3 1つの事に対して集中力が続かない。 4 追い込まれたとしても力が出せる。 5 最後まで決してあきらめない。 6 気合が入っている。 7 1つの事に打ち込める。 8 重要な場面で集中することが出来る。 9 目標に向かってあきらめない。 10 力がみなぎっている。 11 困難な状況に置かれても、最後には何とかしようと思える。 12 何に対してもすぐにあきらめてしまう。
-------	---

表4 やる気と各独立変数の関係（その影響）

(社会的達成欲求、目的達成意識、能力比較、向上欲求、挑戦欲求)

重回帰分析								
Step1	やる気	←	社会的達成欲求	目的達成意識	能力比較	向上欲求	挑戦欲求	
モデル適合								
	SS	df	MS	F値	p 値			
モデル	29.310	5	5.862	27.315	.000			
誤差	21.890	102	0.215					
全体	51.199	107						
適合指標								
	R^2	Adjust R^2	F値	df	p 値	AIC	AICC	BIC
	.572	.552	27.315	5, 102	.000	148.110	149.230	166.885
回帰係数								
従属変数 =やる気								
変数名	係数	標準誤差	95%下限	95%上限	df	t値	p 値	
やる気	0.817	0.278	0.265	1.368	102	2.938	.004	
社会的達成欲求	-0.093	0.060	-0.212	0.026	102	-1.549	.125	
目的達成意識	0.227	0.084	0.060	0.393	102	2.698	.008 **	
能力比較	-0.055	0.060	-0.173	0.063	102	-0.921	.359	
向上欲求	0.468	0.068	0.334	0.602	102	6.930	.000 **	
挑戦欲求	0.143	0.065	0.013	0.272	102	2.183	.031 *	
標準化係数								
従属変数 =やる気								
変数名	やる気		95%下限	95%上限	VIF			
社会的達成欲求	-.133		-0.304	0.037	1.766			
目的達成意識	.223 **		0.059	0.387	1.632			
能力比較	-.066		-0.208	0.076	1.225			
向上欲求	.589 **		0.421	0.758	1.724			
挑戦欲求	.174 *		0.016	0.333	1.523			
R^2	.572 **							

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

5つの独立変数の影響

各独立変数の標準化偏回帰係数を図1に示す。

目的達成意識と向上欲求が、やる気に対して正に有意な影響を示していた。回帰係数はそれぞれ .223 と .589 だった。更に挑戦欲求もやる気に対して正に有意な影響を示して、回帰係数 .174 だった。一方、社会的達成欲求と能力比較はやる気に対して有意な影響を及ぼしていなかった。回帰係数はマイナスだった。

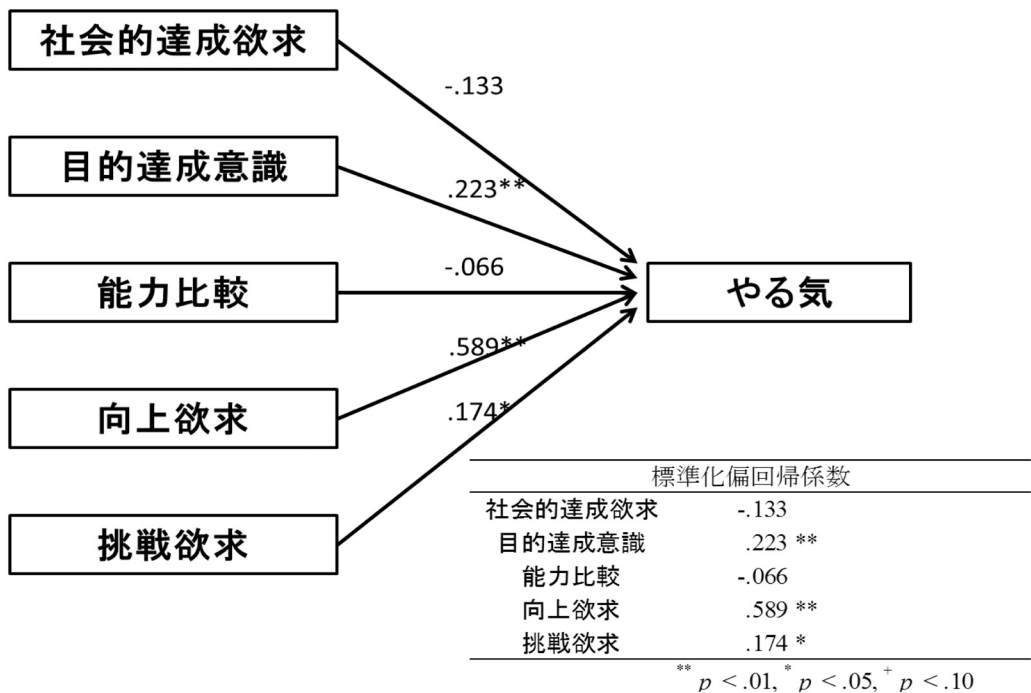


図 1 重回帰分析の結果

考察

やる気の因子構造についての考察

予備調査での改善点である調査人数を増加させたことによって、因子分析を行った結果では因子構造と因子項目がより明らかになった。その結果と先行研究を比較したところ、やはり一部は先行研究と同様の結果になった部分もあったが、再度因子分析をかけることによって少し違う部分もあることが明らかになった。そのため、因子名を改めて命名する必要があった。おそらく、別々の尺度であった「達成動機測定尺度」と「社会的比較志向性尺度」の項目を合わせたため、二つの尺度の噛み合いからではないかと考えられた。「目的達成意識」因子については、先行研究の「個人的達成欲求」因子と「意思比較」因子の両方の項目が合わさったような因子構造をしていた。更に「向上欲求」因子も「挑戦欲求」因子も先行研究の二つの尺度の項目が混じった因子になっている。このことから、先行研究で述べた「達成動機測定尺度」と「社会的比較志向性尺度」の両方ともに深い相関があったということが明らかになった。

まとめて述べると、大学生は、社会的達成欲求には、世の中に出て成功したい、社会の

高い地位を目指したい、周りから称賛される人になりたいと思う。目的達成は他者と意思比較しながら目的達成をしようと思う。能力比較は自分の周り・親しい人と能力を比べたいと思う。向上意欲はいつも目標を持ち、新しいことにチャレンジすること、難しい課題にも根気よくやりたいと思う。挑戦欲求は成功の可能性が少ないでも、他人の失敗していることでもやりたいと思う。

重回帰分析の結果についての考察

重回帰分析を行った結果、各独立変数「社会的達成欲求」、「目的達成意識」、「能力比較」、「向上欲求」、「挑戦欲求」の影響についてみていくと、「目的達成意識」と「向上欲求」が、やる気に対して正に有意な影響を示していた。つまりやる気のある人は目的達成意識と向上欲求が高いことが明らかになった。実際に影響が高かった因子の項目を見てみると、自分自身のしたいことや目標について目を向けているものが多くみられた。一方で「社会的達成欲求」と「能力比較」はやる気に対して有意な影響を及ぼしていなかった。このことからやる気がある人は他人の評価、他人との能力の比較や社会的な欲求を重視していないことが明らかになった。つまり、やる気の高い人の主要な心の働きは自分自身を評価して、他人の評価をあまり気にしないというものであると考えられた。以上のことにより、本研究ではやる気に関する主要な要因は他者の評価に関係が少なく、自己の評価に大きな関係があり、やる気に影響する要因の一つであることが明らかになった。

さらにやる気は内発的であり、自己効力感に強く関係がある。「やればできる」「いま、そのことができる」、やりたい意欲、やれる自信は自己効力感から生まれ、他者との比較より自己評価をすることに関係があること、本研究でも裏付けた証拠が得られた。つまりマズローの欲求段階説という自己実現が大きく関係していると考えられた。

全体の考察・今後の課題

使用した既成尺度について、因子分析と重回帰分析の両方の考察でいえることは、2 つとも調査の時代背景が先行研究と違ったけれども、依然として今の若者に適応できる尺度と言える。これは本題の研究の付属結果でも言える。もう 1 つ言えることとして、今回の調査の対象が大学生であったため、社会人とはまた違った考え方や物事の捉え方があるのではないかと考えられる。社会人になれば出世し、成功して、人生を楽しく生きることがやる気の要因となり得るかもしれないが、大学生にとってそういった評価はあまり重視されていないのかもしれない。

本研究ではやる気の諸要因とどの要因と大きく関係するかが明らかになった。今後の課

題としては、男女の違いについて検討すると意義があるだろう。

今後、男女の比較と社会人との比較を検討し、さらに半構造化面接法も使い、深く掘り下げ調査をする。年齢層を学生だけではなく幅広い年齢層の社会人にも広げて行う。また、尺度の整備を再構成と再検討する必要があるだろう。

引用・参考文献

秋山百合子 木下敦 杉村,睦史

(2003). 気力尺度の作成及び気力と諸要因との関連について

臨床死生学年報 (8), 50-64, 2003

堀野緑 (1987). 達成動機の構造因子の分析ー達成動機の概念の再検討

教育心理学研究, **35**, 148-154.

外山 美樹 (2002). 社会的比較志向性と心理的特性との関連--社会的比較志向性尺度を作成して 筑波大学心理学研究, 2002 年 **24**, Pp 237 -244.

李艶 1994 日本と中国の大学生の達成動機と仕事に対する態度の比較研究

同志社心理 41, 20-32.

李艶 1997 日本と中国の子どもに見られる内発的動機と認知 されたコンピテンスの

交差文化的研究 同志社心理 44, 39-51.

李艶 1999 中国人の仕事の価値観についての研究 日本心理 学会 62 回大会発表

Yamauchi,H.,& Yan Li. (1993). Achievement-related motives and work-related attitudes of Japanese and Chinese students. *Psychology Reports*, **73**, 755-767.

付録

調査用質問紙項目

1. 何事に対しても努力する。
2. やる気満々だ。
3. 一つの事に対して集中力が続かない。
4. 追い込まれたとしても力が出せる。
5. 最後まで決して諦めない。
6. 気合が入っている。
7. 一つの事に打ち込める。
8. 重要な場面で集中することができる。
9. 目標に向かってあきらめない。
10. 力がみなぎっている。
11. 困難な状況に置かれても、最後には何とかしようと思える。
12. 何に対してもすぐにあきらめてしまう。
13. 周りの人々が称賛してくれるような素晴らしいことをしたい。
14. いつも何かの目標を持っていたい。
15. 世の中に出て成功したいと強く願っている。
16. 難しい仕事を上手くやり遂げたと人に言いたい。
17. 何でも手掛けたことに最善を尽くしたい。
18. 他の人が失敗している事でもやりたい。
19. 重要な人々と知り合いになるように努める。
20. 社会の高い地位を目指すことは非常に重要だと思う。
21. 自分の好きなことに上手くなるために努力する。
22. 何か新しいことにチャレンジするのは好きだ。
23. 仕事を上手くやるためには難しいことでも時間をかけてやる。
24. 他人から与えられたことをするより、失敗の可能性が50%あっても自分で計画してやることの方が好きだ。
25. あまり自分と他の人を比べる方ではない。
26. 他の人とお互いに意見や経験について話すのが好きだ。
27. 他の人のやり方と比べて自分のやり方はどうであるか、いつも気にしている。
28. 自分に似たような問題に直面している人が、何を考えているのかをよく知ろうとする。
29. 今まで自分がやり遂げたことについて、他の人とよく比べる。
30. 自分がどのくらい社会的であるかを、他の人とよく比べる。
31. 自分の親しい人の状況と、他の人の状況をよく比べる。
32. 何かについてもっと知りたいと思うとき、それについて、他の人が何を考えているのかを知ろうとする。

